



【住 所】愛媛県松山市文京町1番地

【病院長】瀧上 忠彦 先生

【病床数】745床(一般:742床、感染症:3床)

【検査・治療数】(平成21年度)上部内視鏡検査919件、ERCP 412件、EIS 31件、超音波内視鏡検査104件、ラジオ波焼灼術(RFA)265件、血管造影346件

【スタッフ】医師6名(常勤医)

専門性の高い医療サービスと地域連携で 最大限の患者サービス向上を図る

● 地域連携を強化した「地域完結型医療」の提供が 患者本位の医療サービスを実現する

松山赤十字病院は、大正2年4月に日本赤十字社愛媛支部病院として開設されて以来、約1世紀の長い歴史をもつ地域の中核病院です。「どんな病気でも最初から最後まで診てもらいたい」という地域ニーズに応えるため、長い間「自己完結型医療」を目指した病院運営を行ってきました。しかし一方で、病院の規模が大きくなるにつれて外来での待ち時間が長い、診療時間が十分に取れない、またベッドが埋まっていて長期間の入院待ちが必要となるなど、大病院特有の問題も次第に生じてきました。そこで同院では、地域の医療機関との連携を強化して病状や利便性に応じた最適な医療を地域に提供することを目的として、平成9年11月に県下で初めて地域医療連室を開設しました。初期診療や診断は地域のかかりつけ医が担当し、より高度な治療が必要であったり、また診断が難しい症例については同院へ患者を紹介するという流れを確立し、地域全体で医療の完結を目指す「地域完結型医療」への転換を図ってきました。その結果、平成17年5月には愛媛県知事から「地域医療支援病院」に認定されています。

現在同院では急性期の入院治療に専念し、紹介患者に対しては24時間365日患者の受け入れを行っているため、平成20年度の紹介率が全体の67.5%を占めるなど、年々増加の一途をたどっています。

● 専門性の高い高度な治療を提供するため 肝胆膵センターが独立

地域連携をより効率的に進めるため、同院では各診療科の専門性を高め、他施設との機能面での差別化を図ってきました。平成16年4月には肝胆膵センターが独立し、消化器内科の中でも特に肝胆膵疾患に特化してより高度で専門的な治療を迅速に行える体制を整えました。同センターで部長を務める上甲康二先生は、「肝胆膵センターが独立する以前は、ERCPなどの専門性の高い手技を行う医師も不在で、消化器内科医が適宜対応していました。当センターの独立と同時に胃腸センターも誕生していますが、専門をはっきり分けたことで紹介元が患者さんを紹介しやすいというメリットも生まれ、紹介率が上がっているように思います。また、地域連携を強化したことで急性期患者の症例が増加しているため、診療レベルを均質化するためにクリニカルパスの導入を積極的に行いました。その結果、適切な診療が効率的に行われることになり、入院期間の短縮も実現しています」と、同センターの特長についてご説明いただきました。



肝胆膵センター 部長
上甲 康二 先生

● 専門医が結集したチーム医療で 安全で確実な肝胆膵診療を実現する

肝胆膵センターには現在5名の医師が在籍し、医師はそれぞれラジオ波治療、胆膵内視鏡治療、血管造影などの領域において高い専門性を有しています。肝臓に対する治療は、手術、ラジオ波焼灼術、血管造影(腫瘍塞栓術)を中心にリザーバー動注化学療法、エタノール局注療法なども行っており、特に上甲先生が担当されるラジオ波焼灼術は、年間245例(平成22年度)と全国でも有数の症例数を誇ります。また、副部長の横田智行先生が中心となって行っているERCPは、平成22年8月現在で既に年間400件を超えており、四国全体でトップレベルの症例数を有するうえ、他施設では対応できない難渋症例が集まってきています。

同センターでは、このように高い専門性を有する医師が毎朝全員でカンファレンスを行い、それぞれの見地から症例ごとに適した治療方針をタイムリーに検討して実践していることが大きな特長です。さらに、同センターでは外科や放射線科とのカンファレンスも週1回の頻度で行い、より広い見地から最適の治療方針を策定できるような環境を整えています。こうすることで、治療方針を転換する場合、意思決定から次の治療方法の選択、実行までを非常にスピーディに行うことが可能となり、結果的に入院期間の短縮につながっているそう

です。上甲先生は、「症例数の増加と診療内容の高度化に対応するためには、チームワークを良好に維持することが一番重要です。専門の異なる医師やスタッフがそれぞれの立場や考え方を理解し、チームの多様性を尊重することが、患者様に対する良質な医療の提供に繋がると考えています」と、センター運営の基本的なスタンスについてご説明いただきました。横田先生は、「迅速な意思決定と効率的な診療は、医療経済上も大きなメリットを生みます。また、近年では使用デバイス等に対するコスト意識も重要になってきていることから、デバイスの選択にあたっては、安全性やパフォーマンスはもちろんのこと、コストメリットがあるかどうかについても注目するようにしています。採石バルーンが付加されたESTナイフであるStonetome™を今年採用しました。ESTナイフとしての必要十分な機能を備えている上、高いコストメリットのある製品であることから、日常的な診療で重宝しています」と述べられました。

同センターでは、EUS-FNA等の新しい手技にも取り組みを開始するなど、最先端の医療サービス地域に提供すべく、今後も更に新しい技術の習得を目指していかれるとのことでした。



肝胆膵センター 副部長
横田 智行 先生



肝胆膵センターのみなさん